

特許調査業務の進化：AIとの協業が拓く新機軸

調査方式の三段階進化

従来調査（人が主導）

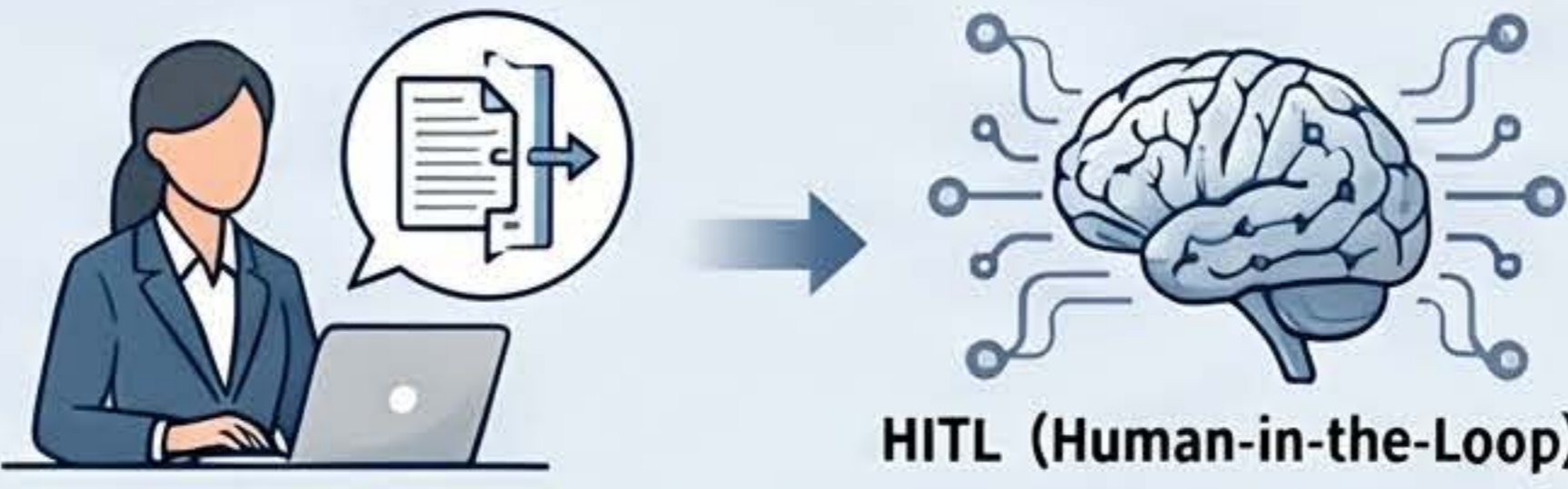


全工程を人が一貫して担当

発明理解から検索式設計、全文読解まで高技能者に依存し、工数比を1.0とした場合の基準となります。

| 方式 | 一次抽出精度 | 再現性 | 主要リスク |
|------|--------|-----|---------------|
| 従来調査 | 高 | 中 | 担当差によるバラつき、疲弊 |

島津型生成AI調査（人とAIの協業）



HITL (Human-in-the-Loop)

ベテランの論理をプロンプト化

熟練者の判断ロジックを組織で共有し、AIが一次処理、人がゲートごとに確認（HITL）することで工数を0.3~0.7xに削減します。

| 方式 | 一次抽出精度 | 再現性 | 主要リスク |
|-------|--------|-----|---------------|
| 島津型AI | 中~高 | 高 | ハルシネーション、遮断節約 |

AIエージェント型調査（AIの自律と人の監査）



監査 (Observability)

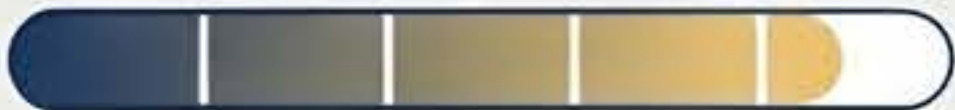
AIが計画・実行し、人は監査に集中

AIが自律的に多相検査や再試行を行い、人は目的設定と最終判断、そしてプロセスの監査 (Observability) を担います。

| 方式 | 一次抽出精度 | 再現性 | 主要リスク |
|---------|--------|-----|---------------|
| エージェント型 | 中 | 中~高 | 計画失敗による誤探案の増幅 |

用途別のAI適合性とリスク

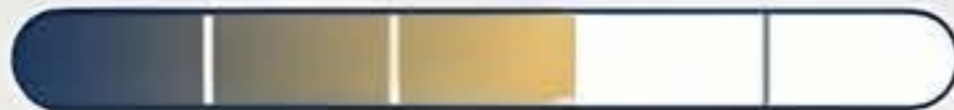
新規性調査 (適合性：高)



AI導入効果が最も高い領域

関連文献の拍性や偶発時度には有望ですが、最終的な活判には依然として人の介入が必要です。

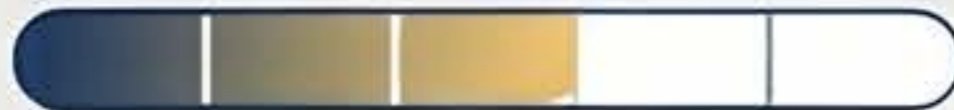
無効資料調査 (適合性：中)



「見つける幅」をAIで広げる

膨大な特許交際 (NPL) の覆育にはAIが有効ですが、無効論点の整理など「深読み」の価値は人に集中します。

FTO / 侵害予防調査 (適合性：優~中)

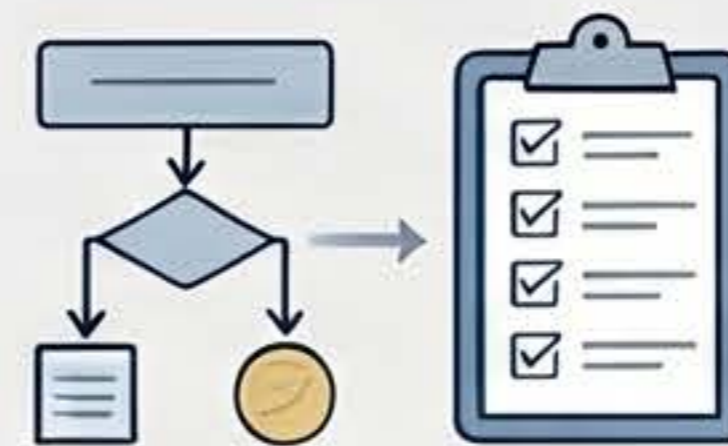


最も慎重な判断が求められる用途

一次スクリーニングの高適化には極めて有効ですが、最終的には各照査に基づく専門家の活判意見が不可欠です。

失敗しないための導入ロードマップ

STEP 1：手動業務の標準化



属人的な手順を可視化する

プロンプト化の前に、「熟練者がどこを見て判断しているか」を手順書として明確にします。

STEP 2：プロンプト化とHITL適用



判断ロジックを組織の資産へ

テンプレートの共有と、各工種に「人類による確認ゲート (Human-in-the-Loop)」を設置します。

STEP 3：監査付きエージェント化



高度な自動化とログ管理の両立

計画・実行・修正の全ログを保持し、誤行や疑義管理までAIに任せつつ、可調性を担保します。

信頼性を担保する「監査ポイント」



根拠の説明可能性 (Explainability)

「なぜその文献か」を常に明示

文献番号、請求項番号、根拠照所のリンク、流的状态の確認日時をセットで出力・保存する必要があります。

島津製作所の導入成果例

圧倒的な工数削減とコスト最適化



年間**8,000**万円の外部コスト削減